

<巻頭インタビュー：音楽クリエイター ヒヤダインさん>

「批評なき音楽語りという困難」

インタビュアー：長崎励朗（桃山学院大学） 歌川光一（聖路加国際大学）
中西良（公益財団法人音楽文化創造）

音楽的なバックボーンと音楽語り

歌川・中西：

今回は、音楽語り、アイドル語りなどをめぐって、音楽クリエイター当事者のご感触をお話いただければと考えております。

長崎：

皮切りとしてですが、ヒヤダインさんみたいな方が現れた時に、どういう影響を受けたのかって不思議に思ったことがありました。まずその辺からうかがえますでしょうか。

ヒヤダイン：

音楽的なバックボーンのことですね。

思春期が90年代で、TKブーム（小室哲哉ブーム）か、GLAY、L'Arc~en~Ciel、Mr.Childrenなどのロックバンドか、でクラスが二分した状態でした。私はTKの方が好きだったので、TKプロデューサーから『ASAYAN』のようなオーディション番組、（そこから登場した）モーニング娘。などの影響は、J-POP的にはとても大きかったです。

一方、海外のR&BだったりとかAOR（Adult Oriented Rock）とかも好きでよく聴いていたっていうのもありますし、小さい頃からクラシックピアノをやっていたので、そこら辺も好きだったっていうのはあります。プラス、後追いで80年代の歌謡曲とかもすごく聴いていた時期があります。

なので、70年代、80年代歌謡曲、TK、そして一部の洋楽みたいな感じで、作られていった感じがしますね。

長崎：

僕みたいな思春期ぐらいから自分で音楽を開拓していったタイプからすると、そういう伝統的



音楽クリエイター ヒヤダイン

な深掘りしていくところと、今流行ってますっていう J-pop っていうのを対立してとらえちゃって、両方聞くんっていうパターンの方が、周りにもいないような気がしていました。

ヒヤダイン：

自分はそもそも渋谷系っていうジャンルが好きでした。ピッチカート・ファイヴとかも好きで、その元ネタを辿ると、あんなに洋楽ライクな曲をしているのに、実は起源は 70 年代のものだったり、ということを探っていたみたいなのもありましたね。

長崎：

TK などは、なかなかそんな感じしないじゃないですか。

ヒヤダイン：

そうですね。とは言え、「だったら何っぽいんだ」って言われても、すごく難しくて。当時は FM802 とかが小室哲哉の音楽はかけないみたいな、選民主義みたいなことをやってましたけど、実は J-POP として席卷した小室哲哉の音楽っていうのは、なんか J-POP っぽいと言えばそうでもなくて…。

歌川：

90 年代、TK ブームとロックでクラスが割れていた、というお話ですが、私には「どっちも流行ってるから好き」みたいな、ミーハー心の思い出が強いんですけど、当時の中高生が割れた明白な理由があったんでしょうか。

ヒヤダイン：

互いに上下を付き合ってた感じはありませんでした。肌感覚ですけど、TK ミュージックに関する軽薄さへの嫌悪感、デジタル音楽に対する嫌悪があったんじゃないですかね。もしかしたら当時の 10 代の男子ならではの、「バンドは、ドラムあって、ベースあって、ギターあって、男らしく歌う」っていうところに、矜持を求める考えがあったのかもしれない。

メディア環境の変化と音楽語り

長崎：

ヒヤダインさんは「ニコニコ動画」でもご活躍されてきた印象がありますが、ニコ動界隈の音楽語りの状況をどのように見えていますか。

ヒヤダイン：

昔だったらフォーク部とかそういうので話したりとかあると思うんですけど、音楽語りっていうのは難しくなりましたね。ネットカルチャーではオフ会とかあるかもしれないですけど、オフ会に行けるようなタフな人たちであって、他の人たちはやはり当時だったら 2 ちゃんねる、と

かそういった匿名掲示板の役割も大きかったんじゃないでしょうか。その後 Twitter とかも出てきますが、一つの議題に関連して喧々諤々するプラットフォームではないですね。

その意味で、ニコニコ動画は、一方通行にはなると思うんですけど、横にスクロールするコメント

で、自分の感想を言ったりできますよね。実際自分も黎明期に、曲への感想が流れたり、また論争みたいなものがコメント内で行われていたこともあり、重要でした。

最近では YouTube にアップロードした楽曲に対してコメント欄で曲の感想とかを言い合うとか、Twitter のハッシュタグで好きなもの同士で感想を言うという感じでしょうか。

ただ、YouTube や Twitter では、ネガティブな声とか批判めいたものっていうのは正直、匿名掲示板とかニコ動に比べて、圧倒的に少ないイメージはありますね。

日本人の良くないなと思うところが、「批判」と「悪口」が混在して同じ意味になってしまうところがあるので、批評や批判をハッシュタグまでつけてやる人は、ちょっと悪趣味と捉えられがちかもしれません。その分、調べる側が積極的に能動的に動いてそのネガティブな批評を拾っていかないと見れない、ぐらいい感じじゃないでしょうか。

そういう意味において音楽を語り合うのはネット上になっているんでしょうね。

長崎：

そうすると、セグメント化が進んで、好きなものしか見ないし、個人の中の多様性は減少していかないでしょうか。

ヒヤダイン：

まさにその通りだと思います。2007～2008年の時点でもそういった、縦横の行き来がないようなセグメント化が起こっていたので、それなのでそれのもっと鋭利になったものが今だなと思っています。今の音楽界っていうのは、例えば「本当に海外でサブリーナ・カーペンターがめちゃめちゃ人気だよっ」って言っても、サブリーナ・カーペンターを好きそうなギャルっぽい日本人の女の子は、「誰？知らなーっ」てなったり、「すとぷりが大好きです」と言う子が同じクラスの子に言っても、全く誰か分からない、とか…。自分たちが音楽聴いてきた90年代に比べたら、圧倒的に断絶がすごいと思います。

アイドル戦国時代に関わって

長崎：

セグメント化の話に関わってですが、ももクロ（ももいろクローバーZ）がサマソニ（SUMMER SONIC）などのロックフェスに出演したりして、ロックおじさんみたいな人たちが結構好きだったことは、意外でしたか。

ヒヤダイン：

全く意外でしたね、本当にそういうこと起きるんだっ、ていう感じでした。

当時は、アイドルといえば、ジェンダーとして“女性性”を売るイメージ、また歌の内容もそういったものが多かったと思います。一方、ももクロは当時、がむしゃらなパフォーマンスで、楽曲はソリッドなものが多く、メインカルチャーに対する嫌悪感みたいなものを持つロックおじさんのイノベーターの応援によって、テーブルに並べていただいたのではないのでしょうか。

長崎：

当時僕はどう思っていたかっていうと、差異化のゲームが始まったなど。「自分たちはロックのスタンダードを抑えてるけれども、同時にももクロもいけるレンジの広さがあるんだ」と言いたいのかなとちょっとうがった見方をしていました。

ヒヤダイン：

それもあると思います。音楽ジャンル好きな人は結構、自分の音楽と他の音楽に貴賤や優劣をつけがたがるってところあると思うんですよね。なのでその当時のおじさんたちにとっても、「我々のような審美眼のある人間でも視聴に耐えうる喜びをもたらしてくれるアイドルが出てきたぞっ」という感覚があったので、そこに若干眉をひそめる感じ、っていうのは分からなくないですね。

一方で、そうやってジャンルを縦断横断していってくださったことは大変ありがたかったです。それこそ、サマソニに出るとか、他のロックバンドと対談するとか、ソリッドな方々に楽曲提供してもらってっていうのを、どんどん開発していったアイドルだったので、私も楽曲提供させていただいた歯車の一個としては、誇らしい気持ちでありました。

歌川：

先ほど、ジェンダーを得る存在としてのアイドルの話が出ました。クリエイターとして、性の多様性が叫ばれる昨今、アイドルとファンとの関係などの変化は感じますか。

ヒヤダイン：

この10年で大きく変わったと思います。やっぱり2010年代のアイドル戦国時代っていう時は握手会だったりとかして、若さや性を売りにしていたっていうところはありました。もちろん今2020年代もそういった面はありますが、例えば最近流行っているKAWAII LAB.

のFRUITS ZIPPERやCANDY TUNEは、カワイイを売ってるんですけど、男性に向かったの可愛いじゃなくて、「私たちがカワイイ、そしてそれでいいでしょ」という、自己完結感があり、結果、ファンは女性が7割だったりするんですよね。自分らしく自分のカワイイをちゃんと享受してそれを発信したい、という感じで、ジェンダー的にはすごい変わった部分はある。

一方、従来通りの価値観をもった男性の受け皿としての女性アイドルというのも役割っていうのもあると思います。特に、握手会とかセッションお話し会とかでたまにお見受けする「お説教おじさん」には、日本の家父長制みたいなものの歪みを感じることはあります。

長崎：

最近、ポピュラー音楽学会で、アイドルではなく、シンガーソングライターにそういう接し方

をする「SSW（シンガーソングライター）おじさん」に関する発表を聞いたん¹ですけど、同種の病理を感じますね。

もう一度、批評なき音楽語りをめぐる

長崎：

今日何度か話題に出てきましたが、音楽に優劣をつけたくなるような場面って、いくらかあると思うんですが、ヒヤダインさんは音楽の上下の感覚がないように感じました。

ヒヤダイン：

「音楽偏差値」などの言葉もあつたりとか、いろいろ音楽に優劣つけたがる人は多かつたりして、その気持ちもよくわかるはわかります。

ですが、音楽自体は本当に優劣じゃなくてで、「1、2時間くらいで打ち込みで作った音楽」と「1週間くらいかけて、手練手管のミュージシャンを呼んでとった音楽」のどちらがいいかを判断するのはリスナーの耳と感性になると思います。そこに、誰が作ったとか、作られた手段とか、どういったミュージシャンを呼んだかという情報っていうのは本当はいらなくて、「結果 is everything」みたいに考えています。

長崎：

先ほど、最近のネット上であんまり攻撃はなくて、どっちかという褒めてくれるという話だったんですけど、その褒め方は、どのようなパターンになるのでしょうか。楽曲自体の中身に対してのフレーズがいいとかいう話になるのか、「これ誰々の影響だよね」とか、そういう形なのか。

ヒヤダイン：

例えば YouTube や X とかだったら、時間を指定して、「ここいいよね」とかいう風にコメント残したりするのが多いと思います。あと、その楽曲単体で評価するというよりも、もはやそのアーティストさんとのパーソナリティとも紐づいている部分が多かつたりもしますね。

今は個人がメディアを持っている状態なので、個人が感想を言いやすい分、炎上リスクが高まっていますよね。私がデビューした頃は、ネット上がまだまだ無法自体だったので、バンバン悪口も書かれましたが、今は、一般のアカウントはそういうことを書いたら速攻に炎上をしますので、逆に「批評をめいたことを言いたい」「ちょっとこの曲良くないんじゃないかな」と思っただとしても裏アカでしか言えない状況になり、批評の自由というのは、抑えられている時代じゃないかなと思います。

先ほどの話につながりますが、批評をしてしまうと、それ自体が誹謗中傷とカウントされて、

¹ 星川彩 (2023) 「女性シンガーソングライター (SSW) のジェンダー・ポリティクスー地下アイドルとの比較を中心に」日本ポピュラー音楽学会第 35 回大会

熱心なファンや信者によって、あられもない言葉で逆に誹謗中傷されたりしてしまいますよね。

長崎：

先ほど出てきた、ネット情報のセグメント化の問題に加え、ギャラリーがいる中で何かを語ることで、「勝ち負け」につながりやい、というネットの特性が絡んでいそうですね。

ヒヤダイン：

そうですね。なのですごい二元論みたいになると思うんですよ。「そういう意見もあっていいよね」ではなくて、「このアーティストを守るために、私はこの意見をねじ伏せるまで戦う」という感じになってしまい、不毛な討論が続くこともあるとも感じます。

音楽語りを萎縮させるもう一つの文脈として、個人がメディアを持っている時代であり、またフェイクニュースなども多くなったせいもあり、発信元にキャリアがあったり、説得力があったり、端的にフォロワー数が多かったり、要するに「一角の人物」のお墨付きがないと「信じないぞ」という傾向が一般の方の中にあると思います。また、音楽語りするのにあたって、「この曲は元々は〇〇の誰々から影響を受けていて…」みたいな話をするのが醍醐味だったとも思うんですが、最近は「マウント」として、鬱陶しがられてしまう面があるかもしれません。

長崎・歌川・中西：

ネット上の関係がフラットに見えて、意外と権威化している、という側面がみえてきました。本日は貴重なお時間、お話をいただきありがとうございました。

ヒヤダイン：

こちらこそ、ありがとうございました。

(2025年3月9日 Zoomにてインタビュー)